4/18/2018

＊キリスト教学演習＊＊＊＊

S. Ashina

＜前回＞

オリエンテーション

Ａ．テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む

Ｂ．テキスト

Paul Tillich, *Vorlesungen über Geschichtsphilosophie und Sozialpaedagogik* (Frankfurt 1929/30), (Ergänzungs- und Nachlaßländе zu den Gesammelten Werken XV, De Gruyter, 2007)

Ｃ．成績などについて

・平常点による。（受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。）

・使用するテキストについては、コピーを配布する。

・参考文献：授業中に紹介する。

・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火３・金５）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うことができる。

Ｄ．授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方

１．演習参加者の役割

(1)授業前：読み・訳す・分析する　→　問題点・補足事項。

(2)授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。

(3)授業後：残った問題を検討する。

・前期半期：4/11, 18, 25, 5/2, 9, 16, 23, 30, 6/6, 13, 27, 7/4, 7/11, 18

・次回：4 月 18 日は、「導入講義２」を行い、メンバーと担当の確定を行う。
演習は 4 月 25 日から開始。

＜導入講義１＞

ティリッヒ――２１世紀へのメッセージ

（『福音と世界』2000. 4、新教出版社）

序　ティリッヒを読む

一　過去 ── 思想史的背景から見たティリッヒ ──

二　現在 ── 二十世紀の神学者ティリッヒ ──

三　未来 ── ティリッヒ神学の未完の可能性 ──

結び ── 永遠的なものへのまなざし ──

＜導入講義２＞

（Ａ）

（『キリスト教学研究室紀要』（第４号、2016 年）掲載論文の校正前原稿）

ティリッヒとその思想的遺産──生の現象学を中心に──

一　はじめに

ティリッヒは、20 世紀のプロテスタント神学と宗教哲学が置かれた問題状況を体現した思想家の一人であり、20 世紀を理解する上で、象徴的な位置を占めている。しかし、ティリッヒの思想は、バルトやブルトマンらの同世代の思想家と同様に、19 世紀の思想との対決継承を推し進めつつも、その思想的遺産は 21 世紀を射程に入れている。本稿では、ティリッヒの死後に展開されてきたこの半世紀の思想状況を念頭に、ティリッヒの思想的遺産を論じてみたい。(1) ティリッヒの思想的遺産と言っても、その範囲はティリッヒが取り組んだ問題領域に対応して広範な内容が指摘できる。しかし、ティリッヒの思想的遺産としては、次のものを挙げれば、その意義は十分に理解することができるであろう。それは、同世代の思想家と比較しても、著しいものと言える。

１．宗教的多元性と宗教間対話 (2)

２．エコロジーの神学 (3)

３．科学技術の神学 (4)

＜略号による引用文献＞

Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.1*, The University of Chicago Press, 1951.

Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.3,* The University of Chicago Press, 1963.

Paul Tillich, *Love, Power, and Justice*（1954）, in: *Paul Tillich. Mail Works 3*, De Gruyter, 1998, pp.583-650.

（B）『福音と世界』2014. 1

神学を問う――その過去、現在、そして未来へ

ギリシャ思想から「神学」を受け継ぎ、キリスト教神学という仕方で自らの学的な営みとして以来、多くの年月が流れた。その間に、幾度となくさまざまな変遷を経て、神学は日本にたどりつき、今日に至っている。二一世紀に入り、すでに一〇年が経過した中で、改めて、日本におけるキリスト教神学の可能性について若干の考察を行ってみたい。

遠い未来は別にして、想像力の届く範囲の未来は、何らかの程度において現在の延長線上に見いだすことができる。神学も同様であり、神学の未来は、現在の、一九七〇年代以降の諸動向の継続と展開として問われざるを得ないだろう。

一九八〇年代、サリー・マクフェイグは、現代において神学する上で必須の「新しい感性」として、次の三つを指摘した（『神のモデル――エコロジーと核の時代のための神学』一九八七年）。すなわち、すべての生命体と人間が本質的な相互依存性にあるという全体論的でエコロジカルな意識、地球の運命、とりわけ核のホロコーストに対する人間の責任性の自覚、そして人間が構築する思想は（当然神学も）隠喩的部分的で不確かであって、その点で限界を免れていないという意識である。マクフェイグの指摘する感性が現代において神学する上で不可欠であることは、その後の神学思想の展開過程においてますます説得力を持ちつつある。これらの三つの内の最初の二つの感性から、環境危機と科学技術という二つの問題を取り出すことができる。これらは、大規模な自然災害（東日本大震災）とそれに連動した大規模な人為的災害（福島原発事故）として、現代日本をそして人類全体を脅かす現実となって顕在化している。日本における、現代における神学はこの問題状

況の只中にあることを自覚しなければならない。マクフェイグの議論にさらに一点付け加えるならば（マクフェイグの言う第三の感性はこれと無関係ではないが）、わたしたちの社会をしばしば分断するものとして作用している多元性を挙げることができる。宗教的多元性はその典型であり、これは民族対立、排外主義、戦争といった問題と密接に関わっている。現代の日本で排他的な自民族中心主義の言説と行動が強まってきていることは、わたしたちの未来に暗い影を投げかけており、日本社会が多元性の問題に適切に対応できていないことを示している。これは神学的問題でもある。

神学は、こうした日本社会と人類が直面する課題をさまざまな立場の人々と共に共有しつつ、自らの基盤に立っていかにこの課題に答えることができるのであろうか。神学は、神、キリスト、聖霊、教会などの諸テーマを、以上の問題群との連関で説得的に提示し、キリスト者とその共同体の実践に関係づけることを求められている。これをティリッヒ的な用語で表現するならば――以下の議論はティリッヒに限ったものではないが――、現代の状況とキリスト教のメッセージとを適切に相関させる課題と言うことができるであろう。この相関に失敗するとき、キリスト教神学（そしてキリスト教）は時代から遊離し状況適切性を喪失するか、あるいはキリスト教神学としての自己同一性を解体するかのいずれかになるであろう。こうした危機的な事態は、近代以降しだいに深まりを見せ、二一世紀の今日、その深刻さはもはや無視できないものとなっている。キリスト教神学の存在を賭けた問題状況、これがわたしたちの現在なのである。

以下において、新しい感性からの展開が期待される神学について、若干のポイントを示すことによって、具体的な議論を行ってみたい。

１　神学の方法論的基盤の再構築

新しい感性に呼応する神学を実現するには、神学の学問的な基盤を再構築することが必要である。もちろん、神学という学問の基盤を問うこと、これは近代以降の神学の基本的な課題であり、すでに多くの議論がなされてきた。実際、近代以降、神学の序論的考察は本論に比しても膨張傾向にある。しかし、これで十分であろうか。たとえば、科学技術を根本から全体的に問い直す作業に関して、現代神学は著しく立ち後れており、生命科学や原子力発電といった現代の科学技術が提出する諸問題に対応できずにいるのではないだろうか。近代以降の神学が、例外的な思想家たちを除いて、自然の問いを背後に忘れてきた結果がここに現れている。この状況を乗り越えるには、神学を本来それが位置している関連諸学問との多様で有機的な関わりに戻す必要がある。古典的な神学体系において、神学と諸学との関係性を支えてきた自然神学に相当する議論を刷新することが求められているのである。そして、この試みは着実に進展しつつある。

２　伝統的な神学区分を超えて

長い歴史の中で、神学においても伝統や学派といったもの作り上げられ、個々の神学的思索に具体的な特徴を与えてきた。近代以降の神学を大きく規定してきたものの一つとしてあげられるのは、カトリックとプロテスタントという伝統区分であろう（もちろん、さらに細分化し精密な区分を行うことは可能である）。しかし、わたしたちはこの古い枠組みをあまりにも自明視してきたのではないだろうか。もっと大胆な発想が求められている

ように思われる。一九三〇年代に、ティリッヒはプロテスタント時代の終焉、つまりカトリックとプロテスタントという区分において規定されたキリスト教の時代区分が過ぎつつあることをすでに見通していたが、この伝統的な区分の流動化は今や顕著である。環境と開発との関わりあるいはバランスをどのように考えるか、フェミニスト神学の問題提起に対していかに答えようとするか、といった論点が現代のキリスト教思想の諸伝統を横断する仕方で存在しており、神学はこうした新しい論点をめぐって二分されつつあるように思われる。神学者は自らの神学地図における位置づけを問い直すことが求められている。あなたは新しい神学地図のどこに立とうとしているのか。

３　東アジアという問題圏の意義

学問は普遍性を志向する。特に神学はそうであり、グローバルな思想状況で普遍的に通用する思想構築という課題を神学も避けることはできない。しかし、この「グローバルな」などと言われる思想につきまとう罠は、あらゆる所に妥当する思想を求めつつも結局は現実性を欠いた抽象化に陥ることである。その点で重要なのは、適切なサイズの問題圏を意識して神学することではないだろうか。日本だけというのでは確かに狭すぎる。わたくし自身にとって現在適切なサイズと思われるのは、東アジアという問題圏である。西欧キリスト教神学と東アジアの宗教文化が交差し、伝統と革新が共存するところ、中国と韓国と日本といった多様な状況。ここから、どのような新しい神学思想が生み出されるかは、一つの思想的挑戦である。こうした問題意識は、日本のキリスト教思想の現場でも一定程度共有されており、今後はさまざまな試みを相互に繋ぐこと、またこうした問題に取り組む若手研究者を育てることが必要である。人文社会系の諸学問分野の中で、神学分野の若手がややおとなしいと感じるのは、わたくしだけであろうか。

４　神学と教会との関わりの再考

現代において、神学の主体は誰か。先にのべた第１点（神学の方法的基盤の再構築）にも関連することであるが、今後神学の主体は神学という閉域を超えてそれと関連する諸学に広がることになるかもしれない――アメリカの聖書研究の動向はこの点から理解できるだろう――。たとえば、キリスト教会にはさまざまな学問分野を専門にする信仰者が所属しているが、こうした多様な学的専門家を巻き込むことができれば、教会は神学的な現場としての意義を再度獲得することになるであろう。日本における神学は教会との積極的な関わりを模索しつつも、その関係構築に必ずしも成功していない。しかし、現代の神学には、従来の神学の境界を超えて、そして大学の枠を超えて、新たな神学的思索の場の構築が求められているのである。そのために、教会には果たしうる役割があるように思われる。近代以降の神学はしばしば教会から遊離する傾向を示してきたが、未来の神学は教会との関わりを取り戻すところで可能になるのかもしれない――ここでは「教会」をいわば広義に捉えておくべきであろうが――。

５　聖書を読むという神学的営みの原点へ

神学と教会との関わりを再考する際のポイントの一つは、聖書を読むという営み、つまり神学の基盤の一つに立ち戻って考えることである。近代聖書学の成果は、聖書の誠実な

読解の不可欠の前提と言わねばならない。しかし、近代聖書学は聖書を読むという営みに亀裂をもたらし、神学的思索との間に断絶を生み出してきたのではないだろうか。この断絶を乗り越える聖書の読解の仕方を発見できるかは、神学の未来を占うものとなるように思われる。確かに、近代聖書学以前の「素朴な」聖書読解に戻ることは困難であり、また選ぶべき選択肢ではないであろう。しかし、近代聖書学にとどまることもできない。求められるのは、批判的思索を通り抜けた素朴さ、哲学者リクールが言う「第二の素朴さ」ではないだろうか。聖書学の知識を用いつつ信仰的に生きることを支える聖書との関わり方、それは教会の内外に形成される聖書の学びのグループとでも言うべき共同体を基盤にして可能になるものかもしれない。そのための条件（神学的文献のネット上での閲覧の可能性や電子ジャーナルという媒体での研究成果の公表など）は確実に整いつつある。

神学することは多くの課題に直面している。しかし、日本における神学の未来を開く作業が次世代を育てる共同の営みの一環であること、これを忘れてはならないだろう。